

製品になるための試練。



ホルベインでは油絵具の製造が終わると、4工程の製品テストを行います。中でも油絵具の置き味や伸びに影響する「粘稠度」を調べるのがスライドメーターという測定器具。まずは、非常に重い調整ロールで絵具を押しつぶします。そして、大きな押型に押しつぶされた油絵具の、かたちの広がり具合によって粘りやさくみを計ります。絵具は精密な製品。いくつものテストを乗り越えて、ようやく製品になるのです。ホルベインの命は品質です。

●20号チューブ(110ml)、全40色で新登場。大きいサイズだけど、品質は変わりません。



**holbein**

ホルベイン絵具

[www.holbein-works.co.jp](http://www.holbein-works.co.jp)

holbein

## 白井美穂

ミリタリー・ジャケットの星のもとに

鷹見明彦 文 森田ケン 写真・印



1993年、成田空港・出発ロビーにて。ACC(アジア・カルチュラル・カウンシル)のスカラシップでニューヨークへ。それから3年後には、ニューヨーカー になって日本と行き来しながら暮らしはじめた



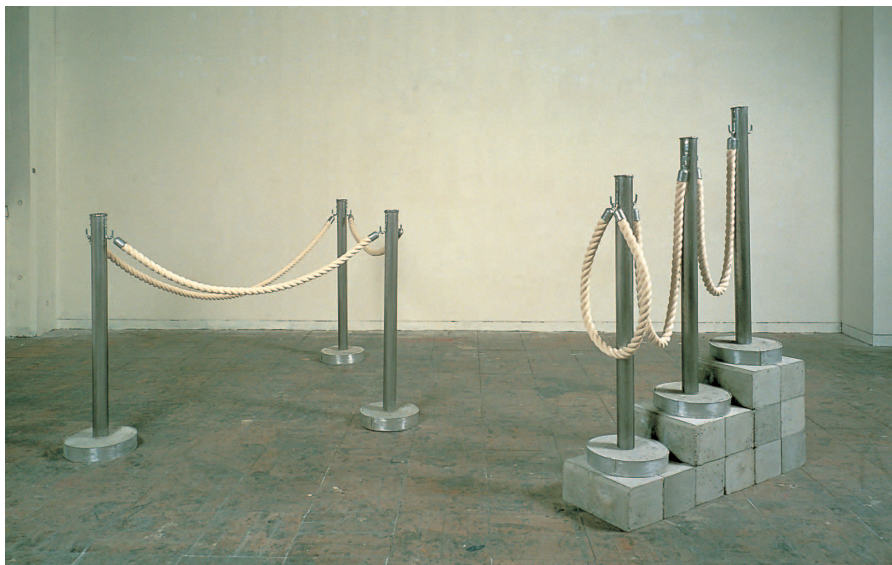
没落の日 1987 合板にアクリル絵具、油彩 273×410×60cm

1987

「ニュー・ウェーブ」とよばれた  
新世代のブームの時期、  
立体にペインティングをして  
図と支持体のずれを見せる作品を  
試みていました」

作家がニューヨークに移り住んで七年あまり、同時多発テロには、グラウンド・ゼロから五百メートルのところで遭遇した。あれから二年が経った初冬に、マンハッタンでの体験から生まれた新作を携えて帰国した作家から、話を聞いた。

白井美穂は、七歳まで京都の東山で育った。父は建築家、母の家は、かつて古美術商を営んでいた。美術の道に進んだのは、そうした環境からの自然な成り行きだった。一九八〇年代の初め、藝大受験の美術予備校では、川俣正、保科豊巳、関口敦仁たちが講師で、予備校生のころから彼らの銀座のギャラリーでの個展をみて影響を受けた。八二年、東京藝大油画科に入学。一年生までは、アカデミックな授業に倦んだが、三年になると、教官として熱心に学生を挑発していた榎倉康一のまわりに集まる「軍団」と交流するようになった。「軍団」の兄貴分には、中村一美や宮島達男などがいた。身体で覚えるという感じてしたね。飲み



## 1989 「社会のシステムをつくる 境界 が問題でした。 観る者の意識の流れを意識して、作品の構造を考えました」

永い休息 / 立入禁止 1989 鉄、鉛、ロープ、コンクリート 100×150×150cm、142×30×100cm 撮影=森岡純

に行くかと絡まれて、抽象的に追いつめられて泣かされた人もいました。「西武美術館でのヨゼフ・ボイス展（一九八四年）や来日したボイスの藝大での講演会、ギャルリー・ワタリ（ワタリウム美術館の前身）のナムジュン・パイクや、ロトリー・アンダーソンには、刺激を受けました」。

《没落の日》（一九八七）は、在学中に銀座で個展をはじめたころの作品。構造物の上にペインティングを施す作品やイメージを空間に展開するインスタレーションが流行で、「ニューヨーク」と呼ばれていた。そこにニュー・ペインティングの波が押し寄せてきた時期だった。吉澤美香、平林薫、松井智恵といった上の世代が、「少女アート」のブームを作っていた。変化は早く八〇年代のおわりになると、ポスト・モダン・イズムの浸透によって、アメリカでは、シミュレーション・イズムが主流になった。

《永い休息 / 立入禁止》（一九八九）は、最初の企画による個展の出品作。よく展示場などで見かける仕切り用の柵のセツトをちがった状態に



グリーン・ルーム 1994 ミクストメディア

して、対比させている。レディメイドに見えるツールは、手作り、同じオブジェの仕様が少し変わることで、『限定』と『無限』といった対極の意味があらわれます。このころの作品は、社会のなかでシステムを作っている境界に焦点を当てていました。

《前へ前へとバウクする》《昨日は今日を後悔する》《一時停止》《確率》…真鍮や合板でスチー板や標識な



## 2003 「反戦の絵は、絵日記のように描きました。ミニマルやコンセプチュアルでは、全体が充たせないと感じて、また絵も描くようになりました」

東京・代官山のヒルサイドギャラリーでの個展「ジョイ・オブ・ライフ / Joie de Vivre」(2003年12月9日 - 26日)より \*  
 壁の絵画(左から右へ) マーチ(メガフォン、3人、ド・ビルバン、既に、4人、ゲルニカ、2人) いずれも2003 キャンパスに油彩  
 床のインスタレーション 北極星 2003 ミリタリー・ジャケット、布ほか 73×185×175cm

などを仮構して、ミマルに境界域を設定した連作には、いずれも意味深なタイトルが付けられた。「当時(八〇年代後半)アメリカやヨーロッパでは、レイメイドやファウンド・オブジェを使う作家が多くなりましたが、彼らの商品や消費社会への批判という傾向と自分の作品には、距離がありました。私は、ものが生活やその用途から外れて、別な文脈のなかで新しい関係や意味をもつことのほうに興味がありました」。

しながら制作するという企画で、ゴダールの「軽蔑」(一九六三)のワンシートのセットを作り、そこで暮らした。「紙粘土で人形を作って並べている」と、ヒロシマ「ナガサキ?」と訊かれました。

九六年からは、ニューヨークに居住した。それから三年目の夏に、乳がんが発見された。すでにリンパ腺に転移していて、危険な状態だった。手術後の放射線と抗がん剤による治療のあと、オルタナティブ医療の権威として知られる主治医による食事やヨガ、瞑想を取り入れた療法をうけて回復する。

藝大で榎倉教室の助手をつとめた後、九三年には、ACC(アジア・カルチュラル・カウンスル)のスカラシップでニューヨークに行った。河原温さんや荒川修作さんのお話も聞きました。荒川さんには、「アートなんかやってないで、人類を救え!」といわれました。

この滞りがきっかけとなって、アメリカと日本を行き来して活動するようになった。「グリーン・ルーム」(一九九四)は、ソーホーのギャラリーでの展覧会に参加したときの作品。十四人の作家が六週間、会場で生活

《マーチ》《北極星》ともに二〇〇三は、五年ぶりの東京での個展の出品作。二〇〇一年九月十一日、通院のためにブルックリンから引越したロウアー・マンハッタンの家で、事件の渦中に巻き込まれた。「日本からの電話で何が起ったかを知りました。やがて煙と灰につつまれると、電話も不通になって、窓から叫びながら逃げる人の声が聞こえてきました。猫たちを置いていけないので、



個展会場の前で。マンハッタンの家で同時多発テロに遭ってから2年が経った。右下に置かれているのは、ブロードウェイの反戦デモで使ったプラカード \*

**しらい・みお** 1962年京都生まれ。86年東京藝術大学美術学部油画科卒業、88年同大学大学院美術研究科修了。91年第7回インド・トリエンナーレ日本代表。93年ACC日米芸術家交換プログラムでニューヨークに滞在、96年以後は同地を拠点に活動する。おもな個展に89年ヒルサイドギャラリー(東京) 92年SOKO東京画廊(東京) 94年イースト・ウエスト・カルチュラル・スタディーズ(NY) 97年モダン・カルチャー(NY) 90年以降ヒルサイドギャラリーで多数発表。おもなグループ展は89年「ART TODAY」(高輪美術館 現・センノ現代美術館、軽井沢) 91年「ザ・サイレント・パッション」(栃木県立美術館) 92-93年「ポランテ、ドビュッ、P-リスト、シライ」(シエドハーレ、スイス) プラハ市立美術館 チェコ) 94年「レッツ・ザ・アーティスト・ライブ」(イグジット・アート[NY]) 「ファール立川アートプロジェクト」(東京) 96年「美術の内がわ / 外がわ」(板橋区立美術館 東京) 「女性の肖像 / 日本現代美術の顔」(渋谷区立松濤美術館 [東京]) 00年「越後妻有アートトリエンナーレ2000」(新潟 など。

そのまま留まりました。数か月は死体を焼く匂いがして、夜中に車ごとおる音だけでも爆弾かとおもって飛び起きました……」。

「新作の絵は、三月二十一日イラク開戦直後の反戦デモを描きました。ブロードウェイを二十万人が埋め尽くしました。《北極星》は、正十二面体の星をミリタリー・ジャケツトで再構築しました。不完全な私たちの爆発した人間が星へと生まれ変わっていく途中だからです」。

ポップでキュートな「マイ・シャリズム」に覆われていたアメリカのアート・シーンにも、七〇年代のシリアスなアートを見直そうとする動きが出てきたという話を聞いた二日後には、潜伏中のフェイェン拘束のニュースが世界を駆けめぐった。「暗黒と苦痛の時代は終わった」というブッシュ大統領の声明とともに……。

(二〇〇三年十一月十日、東京・代官山のヒルサイドギャラリーにて取材)

たかみ・あきひ「美術評論家」